1999年（平成11年）4月10日発行　第228号　（昭和59年10月1日第三種郵便物認可）

教皇様の聲 4 228号

Libreria Editrice Vaticana, Citta del Vaticanoの転載許可済　© 1999

社会の将来は 学校の質にかかっている

★教皇の家へようこそ！皆さんはローマの教師や学生、学校関係者を代表してここにおいでになりました。(…)

「救い主キリストに扉を開こう！」を合言葉に繰り広げられているローマ市内福音宣教も、大聖年まで残りわずかとなった今年、人々が働き、学び、苦しみ、生きているあらゆる場へと入りつつあります。

学生、教師、学校関係者の皆さんも、大聖年の意味とメッセージについては学んでおられるでしょう。それは神の子イエズス・キリストの託身です。彼こそは「私たちと共におられる神」、ただ一人の救い主。すべての人が心の奥底に抱く問いに答えてくださる御方です。誰もが人生の意味について、神について、人間の尊厳について問いかけ、また個人的にも家族や社会の中でも、充実して生きるにはどうすればよいかを問いかけています。

この世について、文化や言語についての正しい知識を学生に育ませるのは、学校に課された使命です。それと同時に学生が開かれた心で真理を探求し、自由と責任を備えた人となるよう助けねばなりません。精神を育てる過程においては、人間の「神秘」を受け入れることが不可欠です。それは神への呼びかけであり、この世での神のみわざに目を開かせてくれます。

全人格発展と教育

★大聖年は改心への力強い呼びかけです。生き方を変えよう。神が私たちと共におられることに気づき、神を受け入れよう。「共におられる神」は、すべての道徳的・社会的混乱の原因となる罪から人間を解放される御方です。大聖年は、正義と連帯のための努力を強く求めます。そしてそれゆえ、老若男女を問わず全ての人が、苦しんでいる人や疎外された人も、人類という一つの家の中で自分の場所を見いだし、兄弟姉妹として認め迎え入れられ、神の子にふさわしい生活を送るための助けとなるよう、重ねられているあらゆる努力に対して激励を送ります。

学校と教育一般には何ができるでしょうか。実は誰も取って替われない重大な使命があります。無知という奴隷状態から人を真に解放することです。最初の教育者である責任ある家庭、国の機関と社会の自由な構成員の最も貴重な投資は、学校と若者の文化に向けられたものであることは確かです。人類の未来も一国の社会の発展も、その大部分は学校の質と、教育機関としての努力にかかっています。

★今度は学校の状況と、学校で起こりつつある変化に目を向けてみましょう。(…) 全人格的な発展を目指す教育・文化プロジェクトを進める必要があります。学校の中心となるのはいつの時代も人間であり、どんな計画も介在も発案も、人間に向けられているからです。このようにして学校は、真理を探求することを教え、人間としての自らの尊厳を理解することを教える共同体となります。こうして文化と生命の価値を伝え、社会に役立つ仕事をするための訓練を行ないます。そして人は出会いに開かれ、お互いの間で、共同体の中で、対話を交わすことを学びます。それは、人間的にも霊的にも、文化と社会の中で成長していく子供や若者の必要に答えることでもあるのです。

(…) 全ての市民と教会共同体メンバーが学校の問題に関心を持ち、子供や若者の十全な形成を助ける適切な手段を講じなければなりません。同時に、困難な状況にあったり無視されている子供たちに特別な注意を払い、彼らの希望や将来の計画を支援し、社会と仕事の世界に居場所を見つけられるよう助けなければなりません。

両親は子供の第一の教育者

★(…) 誰よりも両親こそは子供たちにとって最初の、一番大切な先生です。親の役目は学校を選ぶことにも及びます。教育上・文化上のアプローチが期待や要望に沿うような学校を選ぶことです。親は学校生活にも積極的に加わり、先生たちと親しく話し合いながら、異なる性格を有するけれどもお互いに補う

形で責任を果たします。

教師や学校関係者の役目は、子供たちや若者の形成や指導にかかわることであり、とても重要です。社会全体が学校や教師の役割を認識し、学校を評価したり称えるだけでなく、適切な支援を行なって、形成や教育を続ける必要に応えるべきです。学校の側では、常に自らの霊的・道徳的成長に気を配り、生徒たちの模範となれるよう心がけてください。正確な知識の伝達だけでなく、自分たちの生きる価値観を教える、効果的で信頼できる証人となれますように。

教育とは生徒と教師の間に生まれる深いつながりであり、全ての人が招かれているあの真理と愛に、両者をあずからせるものではないでしょうか。(…)

最後になりましたが、ここローマ市の全ての学校がより一層、有効で実り豊かな成果を収めることを願います。学校関係者と学生の皆さんの上に、「上智の座」「ローマの救い」である聖母マリアの保護を祈ります。愛を込めて、皆さんに祈りと祝福を送ります。

（1999・2・13、ローマ市内の教師、学生、学校関係者たちを招いて。）

今こそ、行動の時！〈若者たちへ〉

「あなたたちは世の光である…。」（マテオ5・14）

若者の皆さん。

▼自問してみてください。福音書の中にあるイエズスのこの言葉を信じますか？イエズスは皆さんを世の光として呼んでおられます。人々の前で、その光を輝かせるよう頼んでおられるのです。皆さんも心の中ではこう言いたいのでしょう。「主よ、私はここにおります。あなたの御旨を果たすために来ました」（答唱詩編、ヘブライ10・7参照）と。でも、イエズスと一致していなければ、その光を分かち持って、世に輝かせることはできません。皆さん、用意はできていますか？

悲しいことに、今日ではあまりにも多くの人が光から離れ、幻影の世界、はかない影と果たされぬ約束の世界に生きています。皆さんがイエズスに目を向けるなら、真理そのものであるイエズスと共に生きるなら、光は皆さんの内にあって、数々の真理と価値を教えてくれるでしょう。正義と平和と連帯の世界を築きつつ、皆さん自身の幸福をその真理と価値の上に建てることができます。イエズスの言葉を忘れないでください。「私は世の光である。私に従う人はやみの中を歩かず、命の光を持つであろう。」（ヨハネ8・12）

イエズスが光である以上、私たちもまた光となって、イエズスを宣言しなければなりません。これこそ皆さんが洗礼と堅信を通じて召されているキリスト者としての使命の中心です。皆さんはキリストの光を世に輝かせるため召されています。

▼幼い頃、暗闇を恐れたことがあったでしょう。今はもう子供ではなく、闇を恐れはしません。皆さんは十代の若者であり、大人です。しかし、この世には別の種類の暗闇があることに気づいているでしょう。疑いと不確実という暗闇です。孤独や孤立という暗闇を感じることもあるでしょう。皆さんの不安は将来への問いかけや過去の選択を後悔することから生じています。

時に、世界は闇に包まれているかのようです。飢えて死んでゆく子供たち、仕事もなく医療も受けられないホームレスの人々。生まれる前の子供たちへの暴力、家庭内暴力、集団の暴力、性的暴力、身心を破壊する麻薬の暴力。多くの若者が希望を失い、自ら生命を絶ってしまいます。この国の各地でも、生命を守ることを誓ったはずの医者が、守るべき人々の生命を絶つことを許可する法律が通っています。神の贈り物である生命が拒絶されています。生命ではなく死を選ぶことで、絶望の闇を呼び寄せているのです。

▼でも、皆さんは光（ヨハネ12・36参照）を信じています。うそや責任逃れ、自己優先をそそのかす声に耳を傾けてはなりません。純潔は時代遅れだと言う人に耳を傾けてはなりません。皆さんも心の中では、まことの愛が神からの賜物であること、結婚による男女の結びつきという神のご計画を尊重すべきであることを知っています。誤った価値、まやかしのスローガンを受け入れてはなりません。自由に関することについては特に、です。自由は神の素晴らしい贈り物であり、アメリカの歴史は自由を大切にしてきました。しかし自由が真理から切り離されるなら、個人は道徳面での方向性を見失い、社会の組織そのものがばらばらになってしまいます。

自由とは、いつでも、何でも望み通りに行なえることではありません。自由とはむしろ、神との関係、またお互い同士の関係という真理を責任をもって生きる力です。イエズスの言葉を思い出してください。「あなたたちは真理を知り、真理はあなたたちを自由な者とするだろう。」（ヨハネ8・32）本当に大切なことから目を離さないでください。イエズスの方を向き、耳を傾け、人生の真の意味と方向を見出しましょう。

祈れば、真の光の源と一致できる

▼皆さんは光の子（ヨハネ12・36）です。皆さんはキリストのものですから、キリストは皆さんを名指しで呼んでおられます。皆さんのまずやるべきことは、教区で、高校や大学の宗教教育の場で、できる限りキリストについて知ることです。

でも真にキリストの人となりを知りたければ、祈りによるしかありません。必要なのはキリストに話しかけ、キリストに聞くことです。現代の私たちは即座にコミュニケーションできる時代に生きていますが、祈りがどれほどユニークなコミュニケーション手段であるか知っていますか？祈りによって、私たちは存在の最も深いレベルで、絶えざる愛の交わりである三位一体の神と出会うことができます。

祈りによって皆さんは世の光となることを学ぶでしょう。祈る人は、まことの光の源であるイエズス・キリストと一つになるからです。（…）

（1999年1月26日、アメリカ・セントルイスにて、若者たちとの謁見の時のお話の続き。）

「終生処女」マリアと教会

聖母マリアシリーズ 22

1 教会は、マリアの永遠の処女性への信仰を常に表明しています。最も古い記述を見ると、イエズスの懐胎を記す場面で、これがマリアの生涯にわたる特性であると考えていたのでしょう、マリアをただ「処女」と呼んでいます。

初期キリスト教徒は、この信仰をギリシャ語の「永遠の処女」〈aeiparthenos〉という言葉で表わしました。マリアの人となりを端的に印象深く言い表わし、その永遠の処女性への教会の信仰を一言で表現するための言葉です。374年に聖エピファニウスがまとめた「第二信仰信条」に、託身（受肉）と関連してこの言葉が使われていました。神の御子は「すなわち、聖霊によって永遠の処女マリアより完全な人間として…生まれた。」(Ancoratus, 119, 5; DS（カトリック教会文書資料集）44)

「永遠の処女」という表現は第二コンスタンチノープル公会議（553年）で取り上げられ、神であるみことばが「聖にして栄光に満ちた神の母、終生処女マリアに受肉し、彼女から生まれた」（DS422番）と断言されました。この教えは他の二つの公会議、第四ラテラノ（1215年、DS801番）と第二リヨン公会議（1274年、DS852番）でも確認され、さらに被昇天の教義を定めた文章（1950年、DS3903番）でも確認されました。そこではマリアの終生処女性が、身体と霊魂ともに天の栄光に上げられた理由の一つとされています。

マリアは出産の前も後も処女であった

2 教会は、伝統的にマリアのことを「出産の前も間もその後も処女だった」と簡潔に言い表わしています。こう言い重ねることで、一瞬たりともマリアが処女でなかったことはない、と断言しているわけです。

中でも、間違いなく最も重要なのは「出産前」の処女性です。なぜならそれはイエズスの懐胎と関係があり、託身の秘義と直接つながるからです。それは最初からずっと教会の信仰として示されてきました。

「出産中、出産後の」処女性は、教会の初期からマリアに与えられてきた「処女」という呼び名が示す通りですが、明らかな疑念が投げかけられ始めたため、真剣な研究の対象となりました。教皇聖ホルミスダスは「神の子が人の子となって人間と同じように時間の中に生まれ、母の胎を開いて生まれたが（ルカ2・23参照）、母の処女性を神の力で保存した」(DS368番）と説きました。この教義は第二バチカン公会議で確認されました。マリアの初子は「母の完全な処女性を傷つけず、かえって聖化した。」(教会憲章57番） 出産後の処女性についても、お告げの時にマリアが表明した処女を守るという意図（ルカ1・34参照）が、その後変わったとは考えられません。さらに、マリアと愛する弟子に対する「婦人よ、これがあなたの子だ」「これがあなたの母だ」（ヨハネ19・26）という十字架上のイエズスの言葉は、マリアには他に子がいなかったことを示しています。

イエズス誕生後のマリアの処女性を否定する人たちは、福音書（ルカ19・26）でイエズスを指す「初子」という言葉が、イエズスの後にマリアが他にも子供を持ったことを意味する確かな証拠だと考えました。しかし「初子」という語は、文字通りには「他に先行する子供がいない子」を意味していて、それ自体が他の子供たちの存在を語っているわけではありません。それに、福音史家が子供が初子であることを強調したのは、ユダヤの法律では最初の男の子に対して一定の義務が課せられていたからであり、兄弟の有無とは無関係です。すべて「最初に生まれた男の子」（ルカ2・23参照）には特別な規定があったのです。

「兄弟」という言葉もさまざまな関係を表わす

3　イエズスには四人の「兄弟」ヤコボ、ヨゼフ、シモン、ユダ（マテオ13・55～56、マルコ6・3）と姉妹たちの存在が福音書に記されているから、と出産後のマリアの処女性を否定する人もいます。

ヘブライ語やアラマイ語には「いとこ」を表わす特定の語がなく、「兄弟」や「姉妹」という語がいくつもの段階の親戚関係を含む広い意味を持っていたことを思い起こさなければなりません。事実、「イエズスの兄弟たち」とは、キリストの弟子であったマリア（マテオ27・56参照）や、意味ありげに描かれている「もう一人のマリア」（マテオ28・1）の「子供たち」を指しています。「旧約聖書の表現によれば、彼らはイエズスと近い親戚だった」（『カトリック教会のカテキズム』500番）のです。

いとも聖なるマリアは「終生処女」です。マリアの特権は神の母であることの結果であり、マリアの全てはキリストの贖いの使命のために捧げられたのです。

（1996・8・28）

教皇さまの動き

●3・6　教皇庁社会科学アカデミーのメンバーを迎えてのお話。教皇さまは、「仕事の中心は人間でなければならない」ことを強調された。「仕事は全ての人にとって中心となる事柄です。仕事は人間存在を向上させ、一人ひとりに社会の中での自分の場所を与えます。そして人は、自分が人類共同体にとって有益な存在であると知るのです。」

●3・11　教皇さまは創刊百周年を迎えるドイツの家族向け新聞の記者と読者の代表をお迎えになった。「貴紙がカトリック新聞としての性格を堅持するのは、時に困難なこともあったはずです。ですから、皆さんは今世紀の報道界の中で、重要な位置を占めておられます。」「残念ながら、量はしばしば質の低下をもたらします。ニュースの内容自体よりも、その報道のされ方やインパクトで世論が左右されることもよくあります。時にはニュースの真実が商品価値の犠牲になってしまったように思えることもあります。」

●3・12　教皇庁科学アカデミーのメンバーに向けてのお話。「科学者の皆さんには、自然界と人間との間に生じる不均衡の原因を探り、それらを防ぎ、問題を解決する方法を提唱してくださるよう望みます。」「人間の行動が生態系に深刻な不調和を生み出し、多くの国々で、また世界規模で、破滅的な結果をもたらすことがしばしばあります。」「自然環境に注意を払い、危険をコントロールするのは人間の責任です。進歩は人々に奉仕するものでなければなりませんが、残念ながら、経済や政治上の思惑が環境への配慮に優先することが多いのです。」「多くの人に役立つためのものでも、物やサービスだけではいくらあっても人間は幸福になれません。同様に、特定の利害にのみ応じる政治や経済力は、国際共同体の利益を損なうもとになることがあります。」「明確な道徳のルールに基づく政治・経済・法制の秩序を打ち立てることが何よりも必要です。そうすれば、共通善を目指して国際協力関係が生まれ、富める国や社会を優先する不公平な特権のため人々が苦しむこともなくなるでしょう。」「自分一人の決心など、国単位で考えればなんの効果も持たないと思われるでしょうが、創造主は人間を創造のみわざにお呼びになったことを考えてください。…一人が行なったどんな小さな善も、社会を変える不思議な効果を持つのです。」

●3・14　朝、ローマ市内の教会でミサをあげた教皇さまは、教区で行なっている子供や若者たちのための活動を励まされた。「これらの形成を通じて子供たちが唯一の救い主イエズス・キリストをもっとよく知り、神の愛を体験することができますように。」「今、若い世代がかつてないほどに真理を求め、むなしい幻想を追うのに嫌気を感じているというのは、本当でしょうか？愛と力をもって福音を彼らに示し、信仰と生活を一致させることができるよう助けなければなりません。現代世界の様々な誘惑に抵抗するためです。今日の福音に登場する生まれつきの盲人のように、イエズスとの個人的な出会いがぜひとも必要です。」「真の教会共同体であろうとするなら、聖体という学校で学び、みことばの食卓と永遠の生命のパンで養われなければなりません。私たちは皆、聖体の秘義に合わせて自らを形作ることを学ばなければなりません。」

「教皇様の聲」　ヨハネ・パウロ二世教皇の説教、書簡、講話等を解説なしにそのまま伝える月刊紙
■毎月10日発行　■定価：送料とも一部186円　■年内定期購読：送料とも一部2,087円（税込）
詳しくは、精道教育促進協会までお問い合わせ下さい。
財団法人■精道教育促進協会 〒659-0093 兵庫県芦屋市船戸町12-6 TEL. 0797-31-3452・FAX. 0797-31-3448
振替口座：01130-8-72393 財団法人 精道教育促進協会